英和生とプレイデー

村上　哲朗

2024年　東洋英和女学院大学大学院　大学院紀要　第20号抜粋（2024年 3 月）

英和生とプレイデー

村上　哲朗 *

Toyo Eiwa Students and Play day

MURAKAMI Tetsuro

1．横浜校地開校とプレイデーのはじまり

「英和に来て38年か、いろいろなことがあったけど、あっという間だった。」

定年にあたって紀要論文集への依頼があった。一般教育科目の保健体育担当者として赴任した私が、とりわけ研究に没頭したということでもなし、とにかく学生達と共にいた時間だったことを思い返すと、赴任と同時に関わったプレイデーが一番の思い出としてよみがえってくる。横浜校地開学から第１回として始められたプレイデーを回想し、プレイデーとそれに全力を注ぎ込んできた英和生の足跡を残すべく本随想に至った。

東洋英和女学院の110周年記念事業として、本学が現在位置する横浜市緑区三保町に短期大学が移転し横浜校地に開校したのは1986年のことである。東洋英和女学院の歴史の始まりといえる鳥居坂のある東京港区の六本木から短期大学だけが横浜に移転したことになる。現在所在する大学院の場所に短期大学があり、良き伝統が育まれてきた。私ごとになるが、当時短期大学に専任の体育教員はおらず、成城大学に籍を置かれる両角堯弘先生が非常勤で授業を担当しておられた。伝統のある保育科と英文科に国際教養科を新学科に加えての横浜校地移転に伴って、専任の体育講師を任用することが決まっていたことから、両角先生のご推薦も加わって、私は1986年４月より東洋英和女学院短期大学の専任講師として学門をくぐることになった。29歳の時であった。

それまで、部活やスポーツのコーチングを担当する研究員として体育大学に在籍していた人間が女子大学に赴任した時のカルチャーショックは大きなものであり、また新鮮なものでもあったことを覚えている。

その５月に、「プレイデー」なるものを学生達が企画し、開催の運びとなった。プレイデーについて聞いてみると体育祭のようなものだが、彼女達のその意味合いは少し違っていたようだった。短期大学が移転したときの学生達においては、保育科と英文科の２年生が１年次に六本木校舎で、２年次を横浜校地でという学年生であり、それに、横浜校地に入学からの保育科、英文科、国際教養科の１年生が加わっていた。「プレイデー」は、特に２年生達にとっては待ちに待った待望のイベントであった。

六本木にあった短期大学校舎には学校にイメージする体育施設がなかった。体育館ももちろんなかったが、外にグランドのような広い運動スペースもなかった。学生達の体育実技は駐車場の空きスペースで行われていたと聞いた。隣接する中・高等部や差し向かいの小学部や幼稚園にはグランドや体育館があり、園児、児童、生徒の元気な声が聞こえていたことだったと思う。２年生になる学生達の思いは、移転先の横浜校地の建設予定であったグランドで思い切り体を通して交流活動する「プレイデー」に大きな夢舞台が期待されていたのだろうと思う。（当時、体育館の建設計画はまだなかった）

＊東洋英和女学院大学　人間科学部　教授
Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

1986年5月28日（水）プレイデー実行委員会（学友会・学生会共催、代議員会協力）によって企画された科別対抗のプレイデーが開催された。芝生もまだ生えそろわないグラウンドで、土煙をたてての運動会であった。種目得点では国際教養科がトップで当初総合優勝の発表であったが、出席点が加えられていることから、加算方法（全員出席しても保育100名、英文と国際教養は150名）に異議が出され、%での算出加算のやり直しをして、結果、保育の1年生と2年生が1位、2位となって翌日に掲示された。青空と土煙の中で盛会となったプレイデーは学生と教職員が一体となって新校地の幕を開けた爽やかな1日であった。当初、「第1回ということは第2回と続けていくのか?」との意見もあったが（確認の意味であったとのことだが）、終了後には、回を重ねることへの疑問符は出てくることはなかった。プレイデーは「英和生の宝物」へとその船舵をきり、第2回開催へと準備のバトンが引き継がれた。

第1回プレイデーの開催テーマは「MAKE A CIRCLE」であった。開催曜日が水曜日であったのは、短期大学では毎週水曜日の午後は学生達の課外活動に当てられていて、学業以外の交流活動として奨励していたこともあって、水曜日を開催曜日にしたものである。プレイデーが学科対抗ということもあって、学生達はもちろん、教員の勝負に懸ける熱の入れようもそうとうなものであった。

当時の保育科長であった芝　恭子先生のプレイデーに寄せたコメントを紹介する。

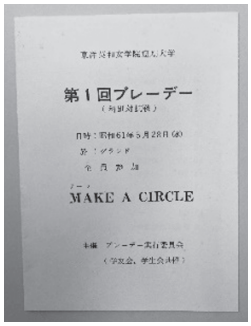
「・・・、私たちは新校地のグラウンドに大運動会を繰り広げました。学生・教職員と全学を上げての参加規模といい、グラウンド面積の規模といい、それは文字通りの大運動会でありました。―中略―　さて、保育・英文・国際と三科の学生達が競った成績の結果は、保一が第一位、保二が第二位となりました。近い将来、柔軟さと敏捷さ、そして強靱さが心身に要求される保育者を目指す学生達にしてみれば、この結果は当然とも言えましょう。もし下から一、二位の成績だったとしたら、私たち保育科の教員は、これをかなり深刻な問題提起として受け止めねばならなかったのだと、互いに笑いながらも真面目に語り合ったことでした。―後略―」

「学生達のいる風景」短大保育部会
（はぐくみ）1986　より抜粋

プレイデーはただの運動会ではなかった。それぞれの学科において学ぶ学生達が近い未来に向けて社会に羽ばたく姿を親鳥のように見つめる教育的な視点が注がれていた。

こうして、大運動会は「プレイデー」として英和生の年間一大行事となったのである。

資料1　第1回プレイデーのプログラム

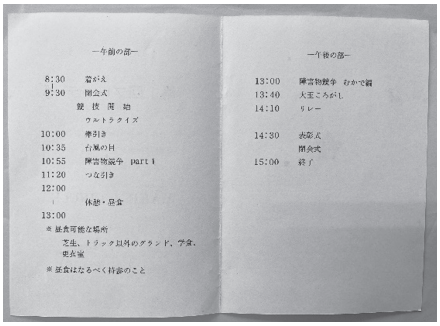

東洋学園短期大学

第1回プレーデー
（対抗競技）

日時：昭和61年5月28日(水)
於：グランド
全員参加

テーマ
MAKE A CIRCLE

主催　プレーデー実行委員会
（学友会、学生会共催）


―午前の部―

8:30　集合式
9:30　開会式
競技開始
ウルトラクイズ
10:00　巻引き
10:35　台風の目
10:55　障害物競争 part I
11:20　つな引き
12:00
休憩・昼食
13:00
※昼食可能な場所
芝生、トラック以外のグランド、学食、要会館
※昼食はなるべく持参のこと

―午後の部―

13:00　障害物競争　おかって綱
13:40　大玉ころがし
14:10　リレー
14:30　表彰式
閉会式
15:00　終了

２．短期大学（含短期大学部）とプレイデー

1986年から始められたプレイデーは、短期大学において毎年開催されていったが、第２回以降は正式にプレイデー実行委員会が組織されて開催されていった。1989年に大学が開学れたが、まだ同様の企画に対する起案のようなものは出てきてはいなかった。

表１は短期大学時代の開催を示したものであるが、短期大学として1986年から1995年、1996年から1998年の３年間は、大学に吸収されることになった短期大学部として開催され、いよいよ短期大学の終焉が決まって1998年に最後となったプレイデーは２年生だけで行われた。

表１　短期大学（含短期大学部）のプレイデーの開催年と足跡

回数	開催年	テーマ等
第１回	1986	「MAKE A CIRCLE」
第２回	1987	プレイデー実行委員会立ち上げ
第３回	1988	
第４回	1998	体育館落成
第５回	1990	「鉄骨娘」
第６回	1991	春・秋2回開催（秋は球技）
第７回	1992	春・秋2回開催（秋は球技）
第８回	1993	春・秋2回開催（秋は球技）
第９回	1994	「One for All,All for One」
第10回	1995	
第11回	1996	短期大学部にて開催
第12回	1997	
第13回	1998	短期大学・短期大学部で最後開催

写真は大学プレイデーから（綱引き）

主として企画されて開催されたのは春のプレイデーであったが、1991年の第６回から1994年の第９回の間は体育館が竣工されたこともあって、秋の球技大会が加えられて企画された時期もあった。こちらは、各学科の中から有志参加で外のテニス、中ではドッジボールやバレーボール、バスケットボールが行われた。写真は春のプレイデーと秋のプレイデーの優勝杯である。プレイデーの種目については、第１回に開催された種目を長年に渡って引き継がれて行われた。開会と閉会には礼拝が守られ、その厳かさは準備運動が終わるあたりから一変する。棒引き、台風の目、障害物競走、綱引きと進められ、昼食を挟んだ午後には、障害物競走の第２弾があり、大玉転がし、そしてリレーでエンディングを迎えるのである。教職員チームも結成されたが、学生達に一蹴された。回を重ねる中で、クラブ対抗リレーや日頃の学生達の活動成果が垣間見られる種目の採用もあった。

短期大学の横浜キャンパス移転から始められたプレイデーは参加した学生達に何を与え続けたのだろうか。以下は、1988年に開催された第３回目となるプレイデーに寄せた学生の感想である。

写真１　春・秋のプレイデー優勝杯

「プレーデー」

＊入学式の次に一大イベントとなったプレーデー。「私達は東洋英和のグランドにいて、ここで学んでいるんだ。そして今日は自分たちで作ったものに参加しているんだ」という実感を持ちました。

＊素晴らしいグランド。外国にでもいるような素晴らしい風景。そこであんなに精一杯燃えることができて幸せです。

＊競技は、いくつになっても夢中になってしまう。何もかも忘れ、童心に返り、皆が一つのことに向かって一生懸命。

＊生活の中で、普段ひたむきになることは少なく、いつも時間に追われ疲れていることが多いのですが、本当は、人は心の底になにか命溢れるものがあり、それを表に出したいという気持ちがあるのだと思います。

＊気が付くと、今日一日で沢山の友達ができた。とても嬉しかった。一人でできないことでも、みんなで力を合わせるとできる。そして、一人で勝つよりもみんなで力を合わせて勝つ方が喜びも大きいのでは!

＊大学で教師と学生の関係は、授業中以外はほとんどないのだと思われるが、英和は違うと思った。先生方がそれぞれの科を本気で応援され、学生も先生も一体になっていた。

＊プレーデーを終えた今日、私は疲れと喜びで一杯です。

（短期大学　保育科１年生の感想より）

短期大学の一大行事は毎年華々しく開催を続けてきたが、短期大学最後の学長でおられた福田垂穂先生は、その時のプレイデー閉会式の総評において学生達に「誇り高き英和生の、ほこり多きグランドでの熱戦」と結び、それを受けた学生達の陽にやけたすがすがしい笑顔と白い歯がよく似合っていた。そして、1998年を最後に短期大学のプレイデーは幕を閉じることになった。

３．幕を閉じたかに見えたプレイデー

1998年度の短期大学部生の卒業とともにプレイデーは幕を閉じたかに思われていた。短期大学部の各学科は大学には組み込まれず、事実上の終焉となり、大学構成員となる教員と生涯学習センター教員に配置されて横浜校地のキャンパスは大学１本となった。

東洋英和女学院大学が日本で初めての社会科学系の女子大学として開学してから９年目の1997年に人間福祉学科が新設され、人間科学科に「幼児教育コース幼稚園教諭１種免許課程」（以下幼児教育コース）が置かれた。一時は、人文学部の大学色になじまないと考えられた保育者養成教育が東洋英和の歴史と伝統を継承することの社会的意義と価値観を重んじたことによるものであったが、これによって東洋英和の保育者養成教育は歴史から途絶えることはなくなったといえた。プレイデーはこの継承に繋がれた保育者養成の学生達から新しい芽となって吹き返すことになるのである。

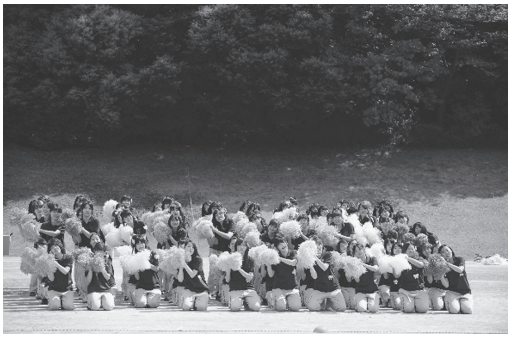
４．大学に引き継がれたプレイデー

1997年度に置かれた人間科学科の「幼児教育コース」は、入学後に面接の後に選択した学生29名で保育者養成が始められた。プレイデーは短期大学部生によって第12回が開催されていた。第13回の短期大学部による最後のプレイデーが行われたとき、「幼児教育コース」の学生は、２学年のみで、２年生の29名と１年生の選択者25名と記録されている。1999年度においてプレイデーは閉じたままであったが、「幼児教育コース」の最上級となった３年生達が、短期大学部から大学に移籍されていた森　眞理先生の研究室に赴き、「先生、お花見しよう!」と持ちかけたことに対して、森先生が「私達、プレイデーしましょう!」と返されたことから新たなプレイデーの火種が付いたといわれる。プレイデーの再開を見ることになるスタートであった。

表２は大学「幼児教育コース」「保育専攻」「保育子ども学科」に引き継がれているプレイ

表２　大学のプレイデーの開催と足跡

回数	開催年	テーマ等
第１回	2000	第1回幼免プレイデー
第２回	2001	「春の陣」
第３回	2002	「パラダイス」
第４回	2003	「It's 幼免WORLD」
第５回	2004	「幼免　Wanderful Life」
第６回	2005	「虹　色いろ幼免's」
第７回	2006	「響　ハーモニー」
第８回	2007	「ゆめ」保育専攻となる
第９回	2008	「和」
第10回	2009	「絆」雨のため体育館
第11回	2010	「翔」保育子ども学科となる
第12回	2011	「響」雨のため体育館
第13回	2012	「花」
第14回	2013	「結」
第15回	2014	「彩」
第16回	2015	「扉」
第17回	2016	「奏」
第18回	2017	「結」優勝旗作成
第19回	2018	「彩」
第20回	2019	「咲く　～えみ～　」
第21回	2020	「わ!」コロナで中止
第22回	2021	「咲く」延期もコロナで注止
第23回	2022	「実」
第24回	2023	「華」



写真は大学プレイデーから（全体ダンス）

デーの開催表である。

以下は、大学に引き継がれたプレイデーの火種となったいきさつである。

『先生、お花見やりませんか？お花見』

そんな一言から物語は始まったらしい。

2000年１月のある日、青柳と織井は森先生の研究室にいたようだ。イベント好きな二人は「春のこぼれ日の中でお弁当だー♪♪」と浮かれ気味だったという。何の計画もしないまま春休みが過ぎ、入学シーズンが訪れた頃事件は起こり、「お花見」から一転、「PLAY DAY」へと名付けられたという。

『PLAY DAY』って何だ？？？　誰もが思うはずだ。そう、彼女達も例外ではない。詳しく聞いてみると『PLAY DAY』とは、短大があった頃保育科の先輩方によって催された伝統ある『大運動会』のことだと分かったそうだ。それからというもの、のんびり屋の彼女たちでもさすがに焦ったらしく、寝る間も惜しむ勢いでPLAY DAYにむけて突進していた。そうして無事当日を迎えていた・・・。

（PLAY DAY　―その内容と軌跡― 2000.4.22より）

こうして、2000年４月22日（土）大学生が新たに企画した「PLAY DAY」が開催されるにいたった。2000年タイトルは「春だ、一番ドラえもん　ニコニコお楽しみ会」として、４年生23名、３年生25名、２年生33名で行われた。１年生はまだ選考前だったこともあって加っていない。大学第１回PLAY DAYの内容は次の通りである。

〈一日の流れ〉

9：00（8103）	集合・着替え
9：30（運動場）	開会
9：35（運動場）	礼拝
10：00（運動場）	ミニ運動会（何人何脚、玉入れ）
10：30	
10：55	片付け
11：00（8103）	昼食
11：50	準備

12：00	パネルシアター（ねずみの嫁入り、河童どんぐり）
（8103）	
12：20	3年生の時間
13：00	質問タイム
13：20	感想
（8103）	
13：30	解散

「幼児教育コース幼稚園免許1種課程」通称「幼免’s」によって新たに芽吹いたプレイデーは、前半のミニ運動会と午後のお楽しみ会との組み合わせで2006年の第7回まで2、3、4年生によって続けられた。2007年に幼児教育コースが保育専攻になると、1年生を加えての開催企画と規模が膨らんだ。総勢356名となって、午後のプログラムを開催していた8101教室には全員が入りきれなくなったことから、プレイデー会場は終日グラウンドとなった。そして、午後のプログラムで行われていたお楽しみ会での目玉発表となっていた保育ならではの劇は、運動会全体をストーリーのある物語に装飾することに組み込まれた。また、団対抗も6団から8団に増やされ、3年生の出し物もあり、最後に披露される4年生の全体ダンスがプレイデーの最後を飾る花となった。2010年に保育専攻は保育子ども学科になったが、プレイデーは同様の形態を保って継続されていった。写真2は、2017年から備えられたプレイデーの優勝旗であるが、それを機に優勝と優勝旗を目指しての団対抗にも一層の熱が込められた。「花見」の火種は大きく育てられて、全学年が春の集結とともに保育が一丸となるべく学生達の良き継承の場となって展開され続けた。

2019年の冬にさしかかる頃、大陸で確認された新型ウィルスのニュースは、あっという間に世界を震撼させた「新型コロナ感染症」として世界中に広がった。程なく日本においても例外ではなく、その脅威は経験の通りである。

にわかに大学も感染症対策が強化され、その年の入学式は取りやめられて大学の学事は大きな対応が迫られた。オンライン授業をはじめとして対面での行事等は全て中止を余儀なくされ、プレイデーもその例外ではなかった。

写真2　2017年に備えられたプレイデーの優勝旗

5．コロナ禍の大学とプレイデー

2020年に開催予定のプレイデーは年頭から準備が進められていたが、果たして開催は中止の決断をせざるを得なかった。短期大学終焉の歴史における中断以外では初めての事態であった。中止の雲行きが濃くなっていく中で、それでも4年生達は中止の決定ギリギリまで開催を信じて招待状を配布して迫る開催日に向けて準備を進めていたが、「～わ！～」みんなで一つの輪を作りましょう♥をテーマにしたプレイデーは中止と決まった。

コロナは収束を見ることなしに2021年を迎えた。2020年開催予定であった東京オリンピックが1年間延期ののちに開催された。2020年に中止を余儀なくされたプレイデーをなんとか継続させるべく新4年生は春開催に向けた例年の開催準備をしながらも、前年の中止経験と好転しないコロナの収束状況を元に、3月の時点で4月開催を回避し、9月に行う案を提示した。掲げられたテーマは、こんな時だからこそみんなの笑顔が咲き誇るようにと「咲」とした。会場も密になることを避けた対策から、9号館での交流会規模で内容も検討された。しかし、半年を経過してもなおコロナの影響は強く、大学

内対応はまだまだ感染対策が強化される中にあったことから、2年続けての中止を決断するに至った。

2022年はまだコロナが蔓延した状態が続いていた。一部大学の授業は対面を取り入れて行われていたものの、警戒レベルであることには変わりはなかった。プレイデーは3年目も中止とするのか、保育子ども学科でも大きな問題となっていた。山本学科主任の「このままではプレイデーを経験した学生がいなくなり、プレイデーそのものの継承が行われなくなってしまう。」という危機感を学科で共有し、山本学科主任は大学執行部会にプレイデーの開催を強く申し出た。どんな状況においてでもできる工夫を施しながら学生達は3年ぶりの4月開催プレイデーを準備した。幸いにもグランドという換気の面ではこれほどにない場所であっても、マスク着用や手指消毒などの感染対策をできる全てに対して行い、ダンス演技も間隔を取った創作に仕上げて臨んだ。

6．プレイデーの再開と意義の再確認

2022年4月23日（土）3年ぶりにプレイデーは開催された。掲げられたテーマは「実」で、実りのある学校生活に期待と思いを寄せたものであった。感染対策からは、これまで全日を通して行われていたプログラムは昼食を挟まない半日で行うものにして、集合体として活動する時間を短くしたものであった。プログラムの最後を飾る4年生の全体ダンスも距離をおいての表現が徹底された発表であった。

プレイデーの再開は、やれることが当たり前だった行事や対面での授業、集合体での活動が、ともすれば当たり前でなくなるということを現実に体験してきたことから、やりたいことが「できる」という意義の尊さを痛感することになった体験の場であったと思う。2023年に入り世界中が「コロナと共存していく日常生活でのスタンス」を取り始めたことは、日本においてもコロナを2類相当から5類に引き下げることで経済活動を維持しようと世界に準じた結果となり、あたかもコロナがいささか収束したかのような解釈に繋がっていることは今以て懸念の中ではあるものの、プレイデーの開催に対しては追い風となったといえる。2023年度のプレイデーは5月8日の政府の正式な5類指定前の4月開催予定ではあったが、勇み足となる開催許可を大学執行部会とされていたアドバイザリーボードに許可申請を行い、プレイデーはコロナ前の通常開催スタイルで開催されることになった。企画準備をしたその年の4年生は、コロナが始まった年に入学し、入学式もなく、プレイデーもなく、オンラインで大学生活を過ごした学年であるから、これまでのプレイデーの実像を生で体験することができず、プレイデーが参加必須の強制的なものではないことから、必ずしも多くの学年生が前年のプレイデーに参加していたわけではなかった。それゆえに、年頭からの準備ではあったものの、なかなか進行イメージに届くのが難しかったのか、最後まで調整を重ねての当日を迎えることとなった。

プレイデーを一から築き上げてきて、継承されるごとに内容の充実さと進行の緻密さが重ねられていった足跡を知っている者としては心配を寄せる部分が少なくはなかったが、新たな一歩からともいえるプレイデーを築き上げようとする学生達によるその期間は極めて価値高い時間の「束」なのだと思う。何もかもが初めてのような取り組みに対して、経験を容易に入れ込んでいくことばかりが課題解決や完成に届く速さに対する助けになるとは思えない。新しい取り組みから芽生えて成長していく新たな木となるよう見守っていきたいと思った。

7．英和生とプレイデー

英和生にとってのプレイデー、それは、たかが運動会ではなく、これまでの歴史になかった「プレイデー」という初めての創造の舞台に対して注がれた英和生の精神を心の限り表現した一場面であり、その舞台を通していかにその時を生きるのかという学生達の魂がひとつの集合

体となって見事に体現された場であったのだと思う。

東洋英和の標語である「敬神奉仕」は強さをも持っている。どんな場面においても学生は英和らしさを醸し出す。言えば、「英和流」にしてしまう生き方をする。プレイデーにもありったけの心と力を尽くして「英和流の運動会」にしているのである。

以下は、当時短期大学の英文科に籍を置いていた井出　新先生（現、慶應義塾大学教授）の「楓園」を通して、プレイデーに寄せたコメントである。

「プレイデー」を終えて

夕方の爽やかな風で草と土の匂いが穏やかになり、グランドに静けさが戻ってくる。今はただ、数時間前の熱気と歓声が木立の間を漂っているばかりだ。プレイデーの度に「大学まできて運動会でもあるまい」と心のどこかにそんな思いがひっかかったまま競技に参加する。しかし一生懸命身体を動かし、学生の笑顔の輝きに目を奪われているうちにこわばりが消え、若かりし頃悪友達と過ごした懐かしい日々の自分が　―体力は別として―　かえってくる。それは不思議な感覚だ。

片付けを終えた有志の学生達が朝礼台のまわりに集まってお互いの労をねぎらい、数人の教職員がささやかな拍手で彼らの健闘を称えている。―心が通い合う瞬間（とき）。そこにはこの時空を共有したものにしか分からない共同体のぬくもりが確かにある。イベントを成功させた喜びや、準備に費やされた汗がやがて忘れ去られてしまうとしても、このぬくもりはきっと学生一人ひとりの中に、ふとしたきっかけで追体験されるに違いない。今日の私がそうだったように。―後略―

（「プレイデー」を終えて　短大便り
PROMENADE 井出　新　より）

英和スピリッツ委員会があった時に、全学によるプレイデーの開催を提案した。おりしも、大学の活性化に対して大学としての「英和らしさ」や「売り」を対外的にアピールして英和生の姿や大学の知名度をアップさせる必要があった。体育祭的な催しは季節間の中で行う行事のように捉えられるかもしれないが、私が見てきた英和の全学プレイデーは学生達の計り知れない潜在パワーを生み出す魔法の大イベントであり、かえで祭と二分する意義が存在していると思っている。よく学び、よく遊び（ここでの遊びは身体の解放のことである）広いキャンパスを存分に活用し、4学科の学生達が互いの専門と歩みを理解し、唯一同じ備え物としての身体を持つ者達が英和流運動会のプレイデーを一同に浸る時間は極めて貴重な場であろうと思うのである。狭い学内をもっと交流する気持ちの中で行き来できたら素晴らしいと思う。

写真は大学プレイデーから（アンコールの前に）

全学で開催される英和生の「プレイデー」が私の願いである。

〈引用・参考文献〉

1. 「MAKE A CIRCLE」PLAY DAY の手引き　東洋英和女学院短期大学学友会・学生会執行部 1986
2. 織井　潤・青柳　潤・津々浦由美子　PLAY DAY　―その内容と軌跡―　2000
3. 芝　恭子　はぐくみ　東洋英和短大保育部会 1986 10 月「学生のいる風景」
4. 短期大学保育科 1 年生 「楓園」第 4 号　巻頭 1988 7 月
5. 井出　新 「楓園」第 11 号　PROMENADE 1992